

僕は、
字が読めない。

小菅宏

集英社インターナショナル
ウェブ立ち読み

僕は、
字が読めない。

小菅宏

集英社インターナショナル
ウェブ立ち読み

序章

南雲明彦の告白

カミングアウト

「ディスレクシア」と知った日

一九八四年生まれ、現在二十四歳の南雲明彦なぐもあきひこが、自分が「LD（学習障害）」の一種に属する「ディスレクシア」であることを知ったのは、長い錯誤と差別を経た後の二十一歳のときで、しかも偶然の機会にだった。

「ディスレクシア」なんて、そのときまで一度も聞いたことがない言葉だったので、最初は、えっ、何それ？　って感じでした。自分の脳や神経系に機能不全があるなんて、それまで考えてもいませんでしたし、それまで何度も精神科や心療内科でカウンセリングを受け、二度も精神病棟に入院したのに、なぜどのお医者も診断をしてくれなかったのかって、いう気持ちがありました。

「ディスレクシア」とは、すでに述べたように日本では「難読症」、あるいは「失読症」「読字障害」とも訳される。

南雲は相手が話す内容を聞き分ける能力には不自由しないし、会話しているだけでは彼がこの障害の持ち主であることはすぐに察せられない。しかし、耳で聞いたことを文字にして書き写したり、あるいは黒板に記された文字を読んだりしようとすると、そこに大変な努力を必要

とする。

それに加えて、南雲の場合、短い間に複数の用件を受けると、最初の用向きを忘れてしまう、「短期記憶」の弱さという症状も持っている。これもディスレクシアに珍しくない症状だと言
う。

二十一歳になった南雲が自分が「LD」であると知るまでの日々、つまり、文字の読み書き
がなぜできないのかと苦しんでいた十代の頃、特に十七歳になる直前の十一月から十八歳の四
月頃まで、南雲の思春期は暴力と自己嫌悪、家族との軋轢あつれき、二度の自殺未遂と自傷行為の繰り返しの日々だった。

この苦しみを何とか治したいと自発的に精神科の病院へ入院したのですが、あの当時は
誰も僕がLDであることを教えてくれませんでした。もっと早く、自分がLD、それもデ
イスレクシアであると知らせてもらえたら、という気持ちは今でも僕の胸の内に渦巻きま
す。しかし次第にLDやディスレクシアの实情を知ることになって、当時の僕と同じように原
因が曖昧あいまいなまま苦しみと闘っている人たちの、何かの助けになれないか、と思うようにな
りました。

LDをめぐる歴史を語るときに、一九六三年、米国イリノイ州シカゴのイリノイ大学障害児研究施設で開かれた、『親と専門家によるシカゴ大会』（知覚障害児基金主催）は画期的な意味を持つ。

その大会の講演で、知的障害児早期教育提唱者として名高いサミュエル・カーク博士が、「Learning Disabilities (LD)」の概念を発表したことを端緒に、米国LD協会(LDA)の前身となる米国LD児協会(ACLD)が設けられて、LD児に対する公的教育が行われる出発点になったからだ。言うなれば、一九六三年は米国における「LD元年」なのである。

しかし、こうしたアメリカでの動きに対して、日本の文部省（現在の文部科学省）が全米合同委員会（LDに関係する米国の八団体で構成されている）の定義を基本に、LDの定義をしたのは一九九九年七月のこと。米国からは三十六年の遅れがある。南雲が長い間、自らがLDであるとは知らなかったのは無理もない、とも言えなくはない。

それはさておき、この文科省の定義によれば、

「学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。」

学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚

障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない」

ということになる（学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議「学習障害児に対する指導について」）。

文科省の定義によれば、LDは「学力の困難」、「言葉の困難」、「社会性の困難」、「運動の困難」、「行動の困難」の五つの困難を持つ子どもを対象にするが、なかでも、読む・書く・計算するという「学力の困難」がLDの中心的な症状だと言われ、「学力の困難」に限って「Learning Disorders（LD）」と呼ぶ。

学習障害 Learning Disabilities も学力の困難 Learning Disorders も、ともに略称はLDであり、前者の Disabilities は無能力・虚弱・障害などの意味を持つが、Disorders には無秩序のほかに、混乱の意味合いがある。知能指数は標準以上でありながら、「学力の困難」であるLDを持つ子どもたちは「なぜ、僕は他の人と同じ状況で勉強ができないのだろう」と心の中に混乱、混沌を抱いてしまう。南雲の場合も、まさにそうであった。

二〇〇六年夏・七月のその日

二〇〇六年（平成十八年）、東京の梅雨入りは六月九日であり、梅雨明けは平年並みの七月

十八日という予報だったが、南雲明彦が六本木を目指した当日は、灰色の雲が都会の空を覆っていた。

その頃の僕はバイト経験などの相次ぐ失敗（後述）から、一人で生きていくことに多少は心細くは思うようになっていました。しかし——ちよつと大げさな言い方ですが——、そんな自分でも少しは社会貢献ができないかという気持ち捨てられなかつたのです。そこで六本木の、あるNPO法人を紹介してもらつて、そこでボランティアの仕事をしうと考えたのでした。

その時期は、言つてみれば、心の中央に空洞を抱えて過ごしていて、未来に希望が持てない状態でした。そこで、ボランティアとしての仕事を得ることで、明日へと繋つなごうと思つたのです。

僕は小学生の頃から、書籍や雑誌を読むのに肝心の活字が霞かすんでしまい、正確に読解するには通常の何倍も時間を要しましたし、文字を一字書くにも枠内に収め切れずに食はみ出して、歪んでしか書けないという二重三重の状態に苦しめられてきました。

文章全体を見てもボヤケて、活字が滲じんで見えるだけで、何が書いてあるのか解読できません。例えば、僕の故郷新潟の「潟」の文字を読むときは、まず「さんずい（シ）」を

認識して、その次に右側の「つくり（寫）」に注意を移します。そうした作業の後に、脳内で左の部分と右の部分を合体させて「瀉」という漢字を理解します。漢字一字の左側と右側のイメージが合致したときの感覚は、脳の一部にスポットライトが当てられて文字が記号として浮上する、という感触、と表現するとしか僕には言いようがありません。そんなわけですから僕が音読する速度は普通の人の何倍もかかります。音読は文字の読解と読み上げという、二つの脳の機能を同時に要するので、僕にはきわめて困難なのです。

後述するが、「なぜ、自分だけ友だちのように読み書きができないのか」との悩みを、南雲は小学校高学年になってから自覚するようになるものの、中学生の時期までは周囲をごまかして過ごした。だが、受験を控える高校二年の夏前、ついに忍耐の限界を超えてしまう。

失敗ばかりの仕事経験

東京・六本木の華やいだ表通りの町並みから避けるように、その日、僕は交差点近くの細い裏路地に入り込みました。なぜか一瞬、安らいだ気分になったのを憶おぼえています。理由は他人の視線が気にならなくなったからです。僕は今でも見知らぬ人の視線に怯おびえることがあります。それについては別の項目で触れますが、「ディスクレシア」のもたらした

特異な意識に起因する、強迫性障害を僕は持っているのです。

僕は廃校になった校舎を利用した、その時はNPO法人が数多く入っていた建物を目指して六本木に来たのです。

僕の目的とは、そのビルの中に入っていたNPO法人「EDGE」(現在は東京の浜松町に移転)でボランティアの仕事を紹介してもらったことでした。当時の僕は三回にわたる転校を経て、四番目に入った「アットマーク国際高校」の通信制課程を二十歳で卒業した頃だったのですが、同校で知り合った先生がEDGEの存在を教えてくれて、このビルで待ち合わせすることにしたのです。

実は、このEDGEこそ、ディスレクシアの正しい理解と支援を目的とするNPO法人でした。その当時の僕はもちろんディスレクシアなんか知りません。で、EDGE代表の藤堂栄子さんから「ディスレクシアとは何か」の説明を聞いているうちに、「あれ、これって僕の症状じゃないか」とびっくりして……。ボランティアをするつもりでEDGEを訪れたのに、実は僕自身がボランティアを受ける側だって気がついたんです。

「ボランティアをする側ではなく、される側に立っているのだ」という現実を突きつけられた南雲だったが、しかし、それでもなお彼の心から「社会に対して自分は何かできるはずだ」と

いう思いが消えることはなかった。それどころか、「何かがしたい」との感情は以前にもまして強くなったと打ち明ける。さまざまな苦難や絶望を経験したあげくに「受け身で生きるのではなく、他人のために役立つ存在になりたい」という思いが、すでに当時から彼の道しるべになっていたのである。

話はそれますが、このアットマーク国際高校は広域通信制課程・単位制・総合学科という、異色の高校です。普通の学校になじめない学生や高校中退者を受け入れて、自由なカリキュラムで、自主的に学べるシステムの高校です。僕にとっては、四つ目の高校です。最初、地元の進学校新潟県立六日町^{むいかまち}高校に入った僕は、次第に授業に追いつけなくなり、高校二年生の夏に地元の学校をやめて、長岡明德高校の定時制、通信制の中央高等学院に転校します。でも、そこでも違和感を感じた僕がたどりついたのがアットマーク国際高校だったというわけです。

この異色の学校で高校卒業資格を得たものの、南雲の就職は困難を極めた。最初は東京タワー近くのホテルのウェイターに採用されたが、一か月足らずで辞めた。研修中に与えられたノートに上司からの仕事上の注意を時間内に記述できなかったのだ。ノートを提出せよと促され

でもメモ書きさえ成立できない現実には、茫然とする。研修担当の上司は普通で話してくれるのだが、それを規定時間内に正しく綴ることができないのだ。「メモをまともに取れない従業員は要らない」との一言に打ちのめされ、退社することにしたのだ。

さらに南雲個人の私生活での難題があった。日常生活における強迫性障害である。

いわゆる強迫性障害には、「強迫行為」と「強迫観念」の二つの側面があるとされる。南雲の場合、「自分は汚れた存在だ」という強迫観念があり、そこから「自分の手が汚れているのでは」といったん感じると、徹底的に手を洗浄しなくては気持ちの整理がつかないという状況に陥る。一日に何時間も洗いつづけなくては気が治まらなかった。

こうした南雲の「強迫行為」によって、当時の彼の両掌の皮膚は乾燥したまま、指紋が薄くなり、指の関節は目立つほど粗く強張ってしまい、倍くらいに腫れた。現在も当時の痕が掌に残っている。

「自分は汚れている」という強迫

強迫性障害のことを言えば、高校生になり、他人の家を訪ねるときも、なるべく両方の手を使わないように左手の腕に鞆をぶら下げ、その左手でドアのノブを握るようにしました。できるだけ自分の体が汚れないようにするための予防処置のつもりでした。でも、次

第にそうすることも煩わしくなり、外出を避けるようになってしまい、家に閉じこもりがちな生活になりました。

でも、いったん「汚れてしまった」と思いだすと徹底的に洗わないと気持ちが悪く着きませんでした。ですから、もうだいたいじょうぶか、もうこれでだいたいじょうぶかと自己確認を繰り返して、結局は何百回、何千回も洗いつづけなければ気が済まなかったのです。今でもその名残りはありますが、以前とは違い、「この手洗いを済ませれば次のことができる」と思えるようになったので、ずいぶん違います。強迫観念に囚われていた時期は、洗っても洗っても「自分は汚れている」と内向きになってしまい、そのマイナス思考から思うように脱出できませんでした。

「何で自分は汚れているんだ！」と叫んで壁を殴ってしまい、そのことでまた「手が汚れてしまった」と、手洗いを繰り返してしまうこともしばしばでした。

南雲にはこうした「強迫観念」の他に、他人との接触についての「対人恐怖」があった。他人の視線に過剰におびえて自己制御ができなくなり、精神の均衡を崩してしまう事態に陥ってしまうのである。

他人の視線が気になる

用事で外出をするとき、それまでの手順で見落としたことがなかったか、間違ったままにしてこなかったか、何か忘れていないか、と何度も頭のなかで記憶を呼び覚まさないで不安で仕方なく、そのつど、部屋に戻って再確認しないと気持ちが悪ざわわして、パニック状態になることも度々たびたびでした。

そうやってようやく外出して、電車に乗っているときも、他の乗客の視線が怖くてならないのです。自分の姿が「他人と違っているのではないか。もし、そうなら恥はずかずかしい」と自分勝手に妄想して、余計に気分が萎縮いしやくしました。他人の視線から逃げるつもりで、色の濃いサングラスを掛けるのですが、それでも顔を上げられません。うつむいたままで外出するのは、神経を遣つかい、ひどく疲れました。

さらに視覚に関することでは、相手との間合い（遠近感）を素早く適度に判断することができず、そのために日常で失態を演じることを南雲は自覚している。

「忘ける」の汚名

最初に就職したホテルではウエディング係も担当したのですが、式の最中に、お客にワ

インなどを注ぐときに何度もこぼしてしまいました。自分ではマニュアルどおりに注いでいるつもりなのに、お客の服を汚す失敗を何回もしました。上司からは叱られ、同僚からは嫌味を言われ、いたたまれない気持ちになりました。自分では一所懸命に努めているつもりなのに、どうしてこんな簡単なことさえ失敗してしまうのか。正直、まったく訳が分かりませんでした。後になり、ディスレクシアにともなつて適切な空間認知ができない機能不全が自分にあることが分かりましたが、当時は自分自身を責め、悔しく思いました。

それでも南雲は、次に新宿にある英会話スクールの営業の仕事を見つけた。書店などで営業のキャンペーンを張るのが仕事内容で、これならばと内心で多少は自信があった。南雲は「自分の口で言うのも照れますが」と断って、「ありがたいことに、僕は外見で他人に好意を抱かれることが結構多いのです」と打ち明ける。

英会話スクールの社長さんにも最初の面接で気に入ってもらいました。でも、いざ研修に入るとノートにいつさい何もメモができていないのを担当者から叱責しつせきされたことで、営業の現場へ出る前に強迫性障害が出て、辞めるハメになりました。言い訳になりますが、僕としては全身全霊を傾けて、聞いた内容をメモ書きにしていたつもりです。しかし僕が

書き留める速度は普通の人の倍の遅さになってしまいました。

というのも、僕の場合、メモを取るには話している人の口を穴の開くほど見つめなくてはなりません。

その人が何を語っているのかを知り、それを自分なりに解釈して理解するには集中力が必要です。でも相手が左右に動いて、僕の視界から外れるとその人の口元が霞んで見えてくるので、眼で追うのが辛くなってしまうんです。だから、どんなに努めても追いつかないのが現状です。

でも、「ノートが書けていない」ということは「研修を聞いていない証拠」と解釈され、「そういう注意散漫な人間は必要ない」との理由で叱責されました。きちんと書いていないのは「怠けているせいだ」と指摘され、そんな怠慢な人間は営業現場で足手纏あしでまといになるとさえ言われました。

この当時の僕は、まだ自分がディスレクシアであることをまったく知らない時期なので、「どうして、こうなってしまったのか」とへこんでしまいました。この頃、僕自身が障害の実体を知り、それを少しでも周囲の人に理解してもらえれば、このような誤解を受けずに済んだでしょうし、苦しむこともなかったと思います。

デイスレクシアは、ギリシャ語の「dys (困難、できない)」と、「lexia (読む)」に由来するが、同じデイスレクシアであっても、一人一人で症状は違う。例えば、「読み書き」に関して、

- 一・長い文章を一定の速度を保ち、正確に読むのが難しいケース。
- 二・文中の語句を抜かして読み、行を飛ばして読むケース。
- 三・例えば「二七」を「七二」と逆さに読んだりするケース。
- 四・字形を混同して読むケース（「ほり」を「おり」など）。
- 五・字を入れ換えて読むケース（「みたけ」を「みけた」など）。
- 六・意味が似通う漢字（「水」を「氷」など）を読み間違えるケース。

などがあり、ほかに「聞くこと」の錯誤、一度見てもすぐに忘れる「視覚的に短期記憶がよいくないこと」や、聞いてもすぐに忘れる「聴覚的に記憶がよいくないこと」などの特徴がある。デイスレクシアは英語圏やフランス語圏に多く見られるとされる。その要因は、英語などの場合、同じ発音でも綴りが何通りもあることを専門家は指摘する。たとえば「r」の発音にしても、tough のように gh が「r」の音を表す場合もあり、しかも、さらにその gh という綴りが場

合によっては無音であったりするのだから（例 コウゴト）、複雑きわまりない。

これに比べれば現代日本語の表記は「発音どおり」が基本だから、英語やフランス語などに比べれば恵まれる環境にあるといえるが、その一方で数千にも及ぶ漢字があり、しかもそれぞれに音読み、訓読みがある。その点では、英語、フランス語とは別種のむずかしさがあると言える。ちなみに男女比率に関して言えば、日本ではディスレクシアをはじめとするLDは男性のほうが多いと見られているが、その理由は不明である。

「あなたが特別な存在ではない」

あの夏の日（二〇〇六年七月）は梅雨空を見上げながら、わずかな希望を胸に伝つて頼たのって六本木へ向かったのです。この日にボランティアへの具体的な見込みが得られないのであれば、新潟の実家へ帰る覚悟を胸に秘めていました。

当日、アットマーク国際高校で知り合った教師と合流して、NPO法人の団体を訪ねました。その教師から紹介されたのが、先ほども言ったEDGEの藤堂栄子代表でした。藤堂代表は僕の症状を聞いて、

「あなたは『ディスレクシア』ですね」

と、即座に答えました。

(デイスレクシア?)

それまで一度も耳にしたことのない「用語」でした。最初のうちは、僕にはむずかしくて理解不能でしたが、先天性の障害に起因する「読み書き困難」な症状、との説明を懇切丁寧に受けて、次第に気持ちが悪くなるのをふしぎに感じました。そして、藤堂代表から決定的な言葉を聞いたのでした。

「あなただけが特別な存在ではないのです」

NPO法人EDGEは、日本におけるデイスレクシアに対する支援や、正しい知識の普及を目指して二〇〇一年に作られた団体であった。いわば、デイスレクシアの研究と普及の専門家である、藤堂代表のその一言が、それまで南雲が抱えていた得体の知れない心の闇を一条の光で照らした。

南雲は長年、生きることによる不安であり、そのぶん孤独だった。読み書きに関する恐怖心のためだ。読み書きが困難だからといって、生活が著しくむずかしい、というわけではない。しかし、自分以外の人間と同じことが同じようにできない自分を許せず、生きることによる不信感を感じ始めたとき、「他人とは異なる人生」に苛立ちを抱くようになる。

普通になりたい、との願いは絶えず心を苛んだ。少なくとも、隣の人と同じでいたい、と思

つたが長い間、果たせないままになった。

思わぬ場所で初対面の方から、自分がディスレクシアだと理解させてもらったとき、とまどったり、怒ったりするのではなく、「これでやっとな救われる」と思えたのが真実です。そのときの解放感はは悪夢から覚めた気分にも似ています。妙な話に聞こえるかもしれませんが、あんどかん「これでやっとな自分にも、ディスレクシアという肩書きができた」という安堵感がありました。それが率直な感想です。

もちろん、それと分かったところで、その日を境に急に日常生活が変わるということではないのですが、字がスムーズに読めず、字がちゃんと書けないのは僕だけではないんだとの実感が胸の内にあふれました。僕は、あの日、真の意味での社会との連帯意識を持ってたんだと思います。六本木での出会いがあつたことで、名無しで孤独な自分に「ディスレクシア」の肩書きが与えられ、居場所ができたこと、気持ちがいぶん楽になりました。

「あなただけが特別な存在ではない」との言葉をかけられた衝撃は、南雲明彦にとって途方もなく画期的だった。

(ほかに多くの人と同じ悩みを抱いて生きている)と、思えることで、それまでの孤立感と

は別次元での、社会との繋がりを意識できるようになった、と理解できる。社会との連帯感とは「人との絆」と言い換えられる。

第一章

母と息子の「五〇九日」

不登校、入院、そして自殺未遂

新潟県立六日町^{むいかまち}高校二年の二学期（二〇〇一年十一月十九日）から南雲^{なぐもあきひこ}明彦は不登校になり、自宅で引きこもりとなった。その日から、母である信子^{のぶこ}（元湯沢町役場所属保育士）は『明彦の状況』と題する記録を^{しよ}記し始めた。南雲が自立を目指して東京に出るまでの母と息子の闘いの「五〇九日間」。この母のノートを背景に南雲自身の告白を記していく（個人情報保護のため、一部ノートの文章を改めた）。

一月一九日（月）（明彦が）学校へ行けなくなる。

高校に入った直後から、僕は授業を受けることに大変な苦勞を覚えるようになりました。教師が黒板に書く文字がぼんやりとしか読めず、授業の内容をノート（書き取り）することができないためです。そこで黒板の文字を書き写すのではなく、教師の話す言葉を頭の中でオウム返しに繰り返して、それをノートに書き取ることになりました。

一口に「読み書き困難」といつてもディスレクシアの人々の文字の見え方はさまざまである。彼らは風景や人の顔を認識することは人並みにできる。しかし、ひとたび文字を読もうとする時、南雲のように文字が霞かすんで見える人もあれば、波打って見える人、鏡に映したように左右逆転して見える人もいるという。

僕のノートの取り方は大変に神経と体力を必要とする作業だったが、それでも一年生のときは頑張れました。ところが二年に進級して授業内容が濃密になり、大学進学を視野に入れる時期を迎えると、僕の成績は下から数えたほうが早いランクまで落ちました。担当教諭から追い討ちのように、「現状のままでは志望大学は無理」と指導されて愕然がくぜんとしました。

でも、担当教諭に、僕は黒板の文字が普通で読めないのですとは「告白」できませんでした。その反動のせいか、「このままじゃだめだ」と気持ちが物凄く焦あせってしまつて、勉強をするにも集中して打ち込めない日が夏休み前からつづきました。

僕の実家のある越後湯沢えちごゆざわあたりは比較的、大学進学熱が高い地域です。兄も大学に通っていましたし、当然に僕も大学に進学するものと思っていました。しかし、僕は文字を読解するのに友人たちより遅れてしまう。いったいどうすればいいのかと悩んだまま二学期

を迎えました。九月、十月と過ぎていくうちに学業の遅れに対処できない苛立ちがげしくなり、十七歳の誕生日（十一月二十六日）間近に、高校へ行けなくなりました。部屋に閉じこもり、人並みのことができない情けない自分がゆくて、自分を殴りたい気持ちで過ごしていました。

JR上越線^{じょうえつせん}で自宅近くの越後湯沢駅から、高校のある六日町駅まで、電車の乗車時間はわずか十五分間なのだが、その日（十一月十九日）の南雲は乗客の視線が怖くて、越後湯沢駅の構内で全身がふるえ、足がすくんで動けなくなったのだ。結局、この日は学校を欠席する。

（南雲信子の証言）学力が目に見えて落ち、不登校になる直前、明彦は雑誌広告で見た通信販売の「速聴^{そくちやう}」の機械を購入しました。黙読するのが人より五倍ほど遅い明彦は、この機械を利用することで自分の難点を克服しようと思ったのでしよう。本人は必死に考えてやったことですが、「そんなことをしても仕方ない」と、私は素人目にも感じていました。でも届いた機械を懸命に操作する本人の後ろ姿を見て、何も言えませんでした。

この時期、もっとも身近にいた母親は、機械によるトレーニングなどでは問題は克服できな

いと感得していた。原因はもっと違うところにある、と感じていたのだろう。だが、現実問題として医療機関（南雲はその頃すでに、地域の医療機関でカウンセリングを受けている）から具体的なアドバイスや診断を受けたわけではない。ましてや、先天的な脳の機能不全だとは母も子も思いもしなかったのだ。

あの頃の僕は「自分は学校があれほど好きなのに」との悔しい気持ちを持って余して、呆然ぜんとしていました。この気持ちを誰に伝えていいのかも分からず、部屋で悶々もんもんとして眠れず、気がつくと朝でした。十一月十九日、身体が動かさず、高校へ行けなくなつたのです。うつ病で暫くしばらく休む、との手紙を担当教諭へ渡してくれるよう友だちに頼みました。

LD（学習障害）を含む「発達障害」とは脳の機能障害であり、その多くは先天的なものとされる。発達障害の原因を親の養育姿勢や家庭環境、TVの長時間鑑賞などに求める議論は、研究者の間で否定されている。

発達障害には、いわゆる知的障害のほかに、自閉症、アスペルガー症候群、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥・多動性障害）など、幅広い障害が含まれる。このうち、自閉症、アスペルガー症候群、さらにはADHDやLDなどは、知的障害とは直接の関係はない。たとえばA

DHDの場合なら、極端に集中力が欠け、落ち着きがないために社会生活を送るのに困難を伴う障害であって、知的能力に問題があるわけではないとされる。自閉症などにおいても、それは基本的に同様である。しかし、残念ながら、こうした発達障害についての知識は日本ではまだ周知のものとなっておらず、それゆえにさまざまな悲劇が生まれている現状がある。

さらに言えば、発達障害^{ひんたう}ハندیキャップと見るのも正しくない。発達障害を持つ人々の中には目を見張る能力を具有する例があるのも事実である。

例えばウインストン・チャーチル（英国首相）、リー・クアンユー（シンガポール初代首相）、リチャード・ブランソン（英国ヴァージン・グループ創業者で冒険家）、ノーラン・ライアン（米国メジャーリーグ伝説の投手）、ウーピー・ゴールドバーグ（有名な黒人女優）、トミー・ヒルフイガー（ファッションデザイナー）、トム・クルーズ（ハリウッド俳優）らは「ディスレクシア」である（財団法人日本障害者リハビリテーション協会『読める』って、たのしい。）。また、現スエーデン王国国王のカール十六世グスタフ陛下もディスレクシアであることを公表している著名人の一人だ。

出世作『カクテル』やヒット作『ラストサムライ』で人気のトム・クルーズは、映画企画が成立して脚本が渡されると、それをスタッフなどの関係者に読み上げてもらい、自分の台詞のみならず出演者全部の台詞を暗記してクランク・インに臨むという。

また、織田信長や坂本龍馬、あるいは発明王トーマス・エジソンなどもLDであったのではないかと見られている。

一月二六日（月） 誕生日だからと学校へ行く。友だちから（誕生日の）プレゼントをいろいろもらって帰る。

一月二七日（火） 夕方、（明彦は町内の）保健センターにてカウンセリングを受ける。

友人からの誘いで勇気を奮い起こして学校へ行きました。実は、担当教諭から「あと十日間登校すれば進級するための出席日数が足りる」と聞かされたので、「通えるうちに行こう」と思ったのです。「ここで夢を諦めるな……」と自分を叱咤もしました。

また友と会話することが当時の僕にとって、最大の励ましでもありました。「来ようと思えば来れるじゃないか」と思った級友はいたでしょう。しかし、当時の僕は「何としても高校を卒業する」という執念で学校に行つたのです。そんな状態のとき、友人から誕生日の贈り物をもたらしたことは、本当にありがたいと思いましたが、帰宅するとまた得体の知れない不安が増し、一晩中、イライラが治まらなくなっていました。

一月二八日（水）「精神状態がおかしいから、どこでもいいので精神科の病院へ連れてってほしい」と明彦がいう。急だったが（職場の）休みをもらい、K病院の精神神経科で受診。夜に飲む薬を一週間分もらって帰る。

自分が何かの病気らしいことは僕にも分かりかけていました。寝ずに熟慮した翌朝、「学校に早く戻りたい」という一心で、母に精神病院行きを打ち明けました。ところが、病院での受診では具体的な治療は指導されず、薬（精神安定剤）を渡されただけで、僕の「不安」は何も解消されませんでした。

僕が精神科での治療と高校卒業に執念を燃やした理由は三つです。一つは、大学進学を目指したのに実家の農業も継がなければならず断念した、父の無念さを人伝ひとつてに聞いていたからです。

二つ目には、あと一年で卒業なのに、ここで高校中退をしてしまえば、親に経済的な迷惑をかけると思ったからです。これは後の話になりますが、僕は自分から希望して東京にある中央高等学院（青森山田高校のサポート校）へ転入して、一人暮らしをしたものの、そこで生活費を込め百万円を越える経済的負担を両親に負わせました。その申し訳なさもあって、何が何でも高校を卒業したかったのです。

三つ目は、当時の僕はスポーツに関わる仕事が将来はしたくて、スポーツトレーナーになる課程を学べる大学を志望していたからです。その夢を簡単に諦めたくない、追いつづけていたいと思ったのです。「未来に希望を抱きつづけられる自分でいたい」、その一心で通院をしたのです。ところが……。

この日、南雲は精神科医とのカウンセリングで徹底的に心を傷つけられた。「あなたは大学受験から逃げたいために入院を望んだんだろう。ここはあなたが逃げて来る場所じゃない。学校へ戻りなさい」と突き放されたのだ。

「この先生は何を言ってるのだろう、そんな理由で自分から入院を望むだろうか。僕は学校が好きで、友と会いたくて、家族に心配をかけたくないだけなのに」という落胆した気分になりました。気がつくとな僕は診察室の壁を叩き壊していました。自分の苦しみを少しでも示したかったゆえの、やむにやまれぬ行動でした。

それでも納得しない様子の精神科医に、それまで誰にも見せたことがない自傷行為の痕を見せました。高校二年の秋頃に煙草の火を押しつけた、左二の腕の火傷です。医師は黙ったまま火傷の痕を見ていましたが、それ以上何も言ってくれませんでした。そんな医者

の様子を見て、僕は思わず我を忘れそうになりましたが、母の顔を見て、その気持ちを抑えしました。破壊した病院の壁の修理費はその後に請求書が届きました。

二月六日（木） 二回目の通院。同じ薬をもらって帰る。

二月三日（木） 三度目の通院。葉が増える。（明彦が）苛立つ。

二月四日（金）（明彦の）イライラが治まらない。

南雲は絶望感が膨らみ、現実がどうなっても構わないと気持ち荒み、自分の感情の処理をできないままに部屋の壁を殴り、柱を蹴りつづけた（現在（〇九年六月）でも、実家の壁には南雲が当時傷つけ、穴を開けた痕が数か所残っている）。それでも気持ちの高ぶりが治まらず、近くの公園へ走り、樹齢数百年の大木の幹を拳の甲で何十回、何百回と殴った。

皮膚の表面が裂けて血だらけになりました。しかしそれでも痛みは感じず、高ぶった気持ち鎮まることもなかったのです。今考えてみれば、実はそうした行動は両親へのS O Sのシグナルであったように思います。僕はこんなに苦しいのに、なぜ親も分かってくれないのか。そんなわがままがありました。

普段は無口な父から強く叱られました。

「ここで終わっていいのか。中途半端だ。できることからしろ、後は自分で決めろ」
多分、父も本音では心配してくれていたのでしょう。ただそれを素直に言葉に表せず、
厳しい表現になったのでしようが、苛立ちまぎれに僕は父に抵抗しました。

するとそこに止めに入った母と僕が揉み合いになりました。軽く突いたつもりでしたが
小柄な母が転倒しました。「あつ」と、内心思いましたが、もうどうしようもありません。
すつくと立ち上がった母が無言で僕の頬を平手打ちしました。僕も平手で母の頬を殴り
返しましたが母はめげずに打ち返して来て、「正気にもどりなさいッ」と叫びました。

いつも陽気に笑っている人、滅多に怒らない人、能天気なほど楽天的な人、というのが
僕の母への印象でしたが、それが一気に覆るような母の激昂ぶりを見て、さすがに心が沈
みました。母を殴ったのはそのときが初めてだったと思います。

おそらく、母に打たれた息子の頬に痛みはなく、母を打った南雲の掌に痛みが残ったはずだ。
しかし、このときの南雲はそんな複雑な気持ちをも両親に伝えることができなかった。この騒動
の結果、南雲は自ら精神科へ入院を決意することになる。

二月二五日（土） 午後になり、急患扱いでK病院へ行き、（明彦を）お願いして入院させる。

二月二七日（月） 入院手続きのために病院へ行く。

二月一九日（水） 私用の帰りに病院へ顔を出す。

二月二六日（水） 五十沢（いかさわ新潟県六日町）の、ばあ（母方の祖母。二〇〇九年七月二十三日死去）

が（明彦の）見舞いに行ってくれる。

二月二七日（木） 夜、（病室の）隣人のいびき鼾で眠れず苦しむ。

入院前にカウンセリングしてくれた医師の対応に満足できなかったので、気分は乗らないものの、治療して治るものならと入院しましたが、六人部屋の病室はひどいものでした。自分から望んだ入院でしたが、隣のベッドにいる五十代の人からは長く入浴をしていないような臭気が漂い、向かいの人は始終、意味不明の奇声を発していました。

夜を迎えると、ますます気持ちが落ち込みました。医師の定期的な回診の時間だけが安心できる、窮屈な生活でした。閉鎖的な病棟で、神経過敏だった十七歳当時の僕は、死について真剣に思いました。頭が狂いそうになるほど混乱しました。「死」という言葉が何万回も頭を過よぎったのは、この病室に入った最初の夜のことでした。でもその一方で「自分は絶対に死にたくない。やりたいことがある」と自分を叱咤しとしていました。

(南雲信子の証言) 明彦が入院したときに衝撃を受けたことがあります。それは入院している患者が服用する薬の多さでした。明彦も薬漬けの人生になるのではとの懸念を抱きました。息子はそのまま死んでしまうのか、と真剣に心配しました。病院の見舞いの帰り道、駅前を通学する明彦と同年代の子を見て、明彦を普通に通学させてやりたい、と思いました……。

現在、若者たちの間で使われている「普通」の意味の違いと考え合わせると、このときの母親の切ない気持ちを察するには勇気が要る。

一二月二八日(金) 何度も電話を寄越して、「死ぬ」とか、「頭がどうにかなりそう」とか、「苦しいときに来てくれないのか」とか言い、電話を切る。昼頃、落ち着く。(職場の) 時間休みをもらい病院へ。この夜から薬が変わる。

一二月三一日から一月二日までいったん退院して外泊。イライラしたときはデパス(精神安定剤)で落ち着いた。

二〇〇二年一月三日(木) 二日にいろいろ動きすぎたのか、またイライラが募る。夕方病院へ。夜になってようやく落ち着く。

一月四日（金）（明彦の）頭痛がひどくなる。

一月五日（土）～六日（日） 外泊。友だちと会う。担当医と話す。夜八時五〇分TELあり。眠れないと訴える。

僕はベッドでじっと何かを待つ時間に我慢できず、病室を抜けだし、病院のスポーツ施設の壁を殴り、大声で叫び奇声を発しました。病室内に閉じ込められることへの恐怖だっただと思います。閉塞感と自己嫌悪に責められて切羽詰まり、体育館への通路口ぐちにあった書籍棚のガラスを割ったのは、怪我を理由に退院させてほしいと思いついたからです。閉鎖病棟は軽度と重度の患者別に收容めいされる決まりでしたが、僕はそのときに暴れたせいで身体を拘束され、多感な時期に凄く惨めな気持ちみじを体験してしまいました。

怪我の連絡を受け、心配した母方の祖父母が見舞いに来てくれましたが、こんな姿を身内の人間にも見せたくないの、「もう来ないでくれ」と、駆けつけてくれた祖父母に悪あくたれを吐きました。本心は余計な気遣いきづかをさせたくなかつたのです。

祖父母が見舞ってくれた日、南雲は尻に鎮静剤の注射を打たれて眠った。

一月八日（火）（病院で）心理テストの結果が出たので、医師の説明を聞く。精神病ではないと思われる。神経症ではないかとのこと。六か月で自然治癒するとの話だった。

一月九日（水）本人、とても元氣になり、退院できる見通しができ、夜もよく眠れるようになる。

今にして思えば、自分の悩みの原因が専門医からも明らかにされないのは承知の上で、それでも「僕の心の痛み」を家族だけには知っていてほしい、という足掻きあがに背中を押されて、精神科への入院を志願したのだと思います。

この時期以降、南雲の心境は変化しはじめた。単に自己嫌悪に陥たるのではなく、前向きに「この苦しみの元凶を徹底的に知りたい」と考えるようになった。それゆえに、南雲は何度も転院を繰り返すことになる。自分の置かれた状況の原因が解明されれば、治療方法も見つかり、将来への「夢の描き方」、あるいは「将来への生き方」が明確になると信じたのだ。

ところが病院の心理テストでは「神経症のようであり、半年もあれば自然治癒ちゆする」という宣告が下された。これによって、南雲はさらに迷いを重ねることになった。

この入院のとき、自分が「ディスレクシア」だと分かっていれば、後に僕が体験する差別や錯誤も少しは違ったものになっていただいでしょう。しかし、退院はしたものの他人の視線は心に痛く感じられ、やっとなんとか高校へ通えるようになっても、通学の電車内は悪夢そのものでした。電車に乗っていると見知らぬ乗客が僕をじっと見ているとの錯覚に陥り、その恐怖から逃れたくなくて全身が鳥肌立ち、汗まみれになりました。自分の狂っている部分が外見に表れているのではないか。その「狂気」を見られて嘲笑されるのでは……という疑心暗鬼にがんじがらめになるのです。

この状況になるとすべてがマイナスに作用して、駅員もコンビニの店員さんも視野に入る全部の人が気に障りました。プラットホームで電車を待つあいだも背後の乗客が気になって、いつも一番後ろから乗車するのが当時の僕の習慣でした。

二月二日（土） 午前退院。

普通ならば、退院で解放された気分が嬉しかったはずでしょうが、僕は母がハンドルを握るクルマの後部座席で身体をシートに沈めていました。誰にも顔を見られたくない気分でした。何も解決していないと思い、微かな期待さえ抱けない心境だったのです。

国道十七号線の小千谷付近だったと思います。道路脇に雪が積もっていたことをわずかに覚えていきます。

時速五十キロ程度の走行で母が慎重にブレーキを踏んだとき、僕は後部座席のドアを押し開いて、凍りついた道路へ身を投げだしました。もうどうなっても構わない、と半分自棄けでした。生きていても仕方ないと投げやりでした。

その瞬間のことは詳しく憶おぼえていません。ただ、全身が冷たい道路上を滑って転がる感触だけが残っています。いまでもそのときの傷痕が背中にあります。後ろを走っていたクルマが避けてくれたので、僕は命が助かりました。

なぜこんなことをしたかといえば、一つには「このまま退院しても何の解決にもならない。また別の病院へ移らなければ」という焦りがありました。しかも厄介やっかいなことに、正氣に戻ると冷静に僕を見つめるもう一人の自分がいて、「お前はこの世に要らない人間だ。いなくなってもいいんだよ」という幻聴も聞こえたのです。正氣と狂氣が交互に僕の頭のなかを駆けまわり、ささやきました。

(南雲信子の証言) 私が運転するクルマの後部座席から飛び降りたあとも、明彦は家の二階から庭へ飛んだりする異常行為をしました。当然ですがそのたびに気持ちは動転しまし

た。このまま放っておいたら明彦がダメになる、と思い、その当方で十五年以上勤めていた仕事（湯沢町役場の保育士）を辞めようかと一時は覚悟しました。

また、東京で一人暮らしを始めた頃（後述）、「死にたいけど死ねない」とか、「今日も死ねなかった」と頻繁に電話を寄越したこともあり、正直、気が動転しました。でも、親の自分が取り乱しては息子の居場所がなくなる、と明彦に悟られないよう冷静さを心がけました。すぐに駆けつけてやりたいと焦る気持ちを抑え、今、側へ行ってしまえば息子の将来のためにならないと我慢しました。後で涙が止まりませんでした。

遠く離れて悩む息子の状況は、母親として身を切られる思いだったにちがいないが、その衝動を抑制したことに「母親の矜持」が垣間見える。高揚した感情に流されず無言のうちに息子の自立を促したのは、何よりも揺るぎない「母親の優しさ」なればこそではなかったのか。

一月一九日（土） 明彦がインターネットで探した東京・高井戸（杉並区）にある自律神経相談室へ一緒に行く。治療をしてもらい、本人は気持ち楽になった様子。少しずつ、近くのカルチャーセンターで体を動かすようになる。

一月二一日（月） 東京・池袋にある通信制の青森山田高校へ、（明彦と）見学に行く。その夜、

六日町高校の大塚先生にTELし、転入学について話す。

一月二四日（木）午前中、退院後初めてK病院へ行く。夜八時三〇分頃、大塚先生が来る。すぐに転校しないで二月に少し登校し、四月からそちら（青森山田高校）へ行ったらどうかとアドバイスをもらう。

一月二六日（土）明彦一人で東京・高井戸へ治療に行く。

南雲が当時、通うことを考えたのは青森山田高校の広域通信制課程・東京校であった（現在は渋谷に移転）。広域通信制課程は、その名のとおり、本校が所在する都道府県（この場合は青森県）以外に住所を持つ生徒も受け入れるものを指す。通信制であるわけだから、毎日、学校に通う必要はないのだが、自宅学習以外に一定の面接指導（スクーリング授業）を受けることが義務とされる。青森山田高校の場合、東京の他、札幌、山梨などに校舎があり、そのほかに「サポート校」と呼ばれる協力拠点でスクーリングを受けることもできる（南雲はのちに青森山田高校のサポート校である中央高等学院に通うことになる）。

南雲が青森山田高校への転入を考えたのは、将来のために大学受験資格の取得を目指したからだが、友との関係で人生の進路に決定的な差をつけられたくないとの思いもあった。「大学を断念するのは死んだも同然」と当時は信じたせいでもある。結局、南雲は転入先として、新

潟県立長岡明德高校の定時制を選ぶこととなる（後述）。

この頃の僕は何かに訴えていないと不安で堪らず、そこで自分の身体を傷つけました。東京へ治療に向いたのも、そんな自分の気持ちも鎮めたいからでしたが、同時に、地元から離れた場所へ行きたいという気持ちもあって、それには東京が適していると決めました。

東京への通院はいわば逃避の側面もあったわけだが、内実は、何かしなければ何も始まらない、との思いに駆られたのだ。東京・高井戸への単独での往復は、当時の南雲に得がたい体験となり、ほんの少し自信になった、と明かす。

でもコンビニで買い物してもレジに並べませんでした。突然、頭が真っ白になりパニック状態に襲われたからです。ところが、いつの間にかコンビニで客の少ない時間帯が事前に分かるようになったのはふしぎです。この時間は空いているから客に会わずに買い物ができる、との予知能力の感覚です。ただ、何も悪いことをしているわけでもないのに、他人との接触を避ける僕の生活感覚は異常だと憂鬱は消えませんでした。

一月三十一日(木) ～ 二月一日(金) (明彦は母の実家の) 五十沢へ泊まりに行く。運動を始めてからずっと頭痛がするというので、急遽、午後^{きんごう}に病院へ。粉の薬を止めてみようとのこと。

二月二日(土) 学校(県立六日町高校)へ行ってみようか、と言いだし、友だち、先生に連絡する。朝の始発で学校へ行く。髪を何とか黒くして(筆者注・その前は気分転換で髪を染めていた)二か月ぶりの登校。一時間目の授業を受け、二時間目は保健室へ行き、休む。先生と話をしたらしい。頭痛がするので大変な様子。午後三時に帰宅。また夜、友だち宅へ出かけ一泊する。

二月三日(日) 昼頃に帰宅。午後休む。夜、豆撒き^まをする。

二月六日(水) 「倫理」の授業を受けるため登校する。

二月七日(木) 午後二時に予約してK病院へ通院。眠れるようになったので睡眠誘導剤は不要となり、朝・昼・夜の薬のみ。デパス(精神安定剤)を飲まなくなり頭痛が治る。

二月九日(土) 東京へ治療に行く。午後四時頃帰って来る。

LD(学習障害)に限らないが「発達障害」では、物の見方、物の把握が他の人とは違うケースが少なくない。つまり彼らが学習やコミュニケーションに困難を感じるのは、物や他人への感覚が他の人と違うためでもある。そのことを周囲の人間は理解する必要がある。彼ら自身

の知能が劣っていると見るのは大きな誤解である。彼らの違和感の本質を理解して、それに見合った適切な教育を行えば、社会にじゅうぶん適応できる可能性が広がっていくのである。

二月二日（月）（この冬初めて明彦は）スキーに行き、一時間半くらい滑る（場所は越後湯沢ナスパ）。

二月二日（火） 学校が休み。友だちと遊ぶ。

二月三日（水）～一四日（木） 登校。

二月五日（金） 発熱のため学校を休む。午後（体温が）三八度五分、夜三九度と高くなる。

二月六日（土）（明彦が）中山医院へ行く。インフルエンザA型とのこと。点滴をしてもらい、薬を五日分もらって帰宅。

二月七日（日） 熱が下がる。食欲はいま一つ。

二月八日（月） 少しだけだるさが残る。食欲はいま一つ。

二月九日（火） 夕方、中山医院へ行き治癒証明をもらう。

当時、僕の心身をリフレッシュさせてくれる唯一の時間がスポーツをしているときはずだったのに、大好きなスキーをしても僕の内心は常に前途への不安ではち切れそうでし

た。人生で自分の未来に薔薇色の夢を描く思春期に、将来どころか、「オレの明日はどうなるんだ」と灰色のままでした。その思いが強迫観念となって胸の底に横たわり、気が狂っても不思議でないほどの苦痛との闘いが続きました。弱気になると、誰かこのイライラから救ってほしいと願ひ、それには大好きな学校で友と会うのが一番だと思って思い切つて登校するのですが、過度の緊張からかえつて体調が悪くなり、愕然としました。

思うに、この時期、南雲が登校したエネルギーの源泉は、自分の存在を見失いたくない、自己確認をしたいという思いだったのではないか。

ただ、そのことの根源に南雲の明日への強い願望が窺い知れる。

二月二〇日(水) 登校するが昼食の弁当は食べられない。

二月二一日(木) K病院へ通院。(明彦が)一人で行く。

二月二二日(金) 期末テストを保健室で受ける。昼食を保健室では食べられた。午後三時頃、担任の大塚先生と明徳高校を見学に行く。午後六時頃、家に戻って来る。

二月二三日(土) 東京への通院に同行する。二時間の治療に疲れを見せる。

二月二四日(日) 午前中、ゆったり眠ったりしていた。

二月二十五日（月） テスト二日目。ほとんど休んでいる状態だったが、一応、机に向かっていたらしく、疲れた様子。バレーボールもしたらしく、教室で弁当を食べたとのこと。

二月二十六日（火） テスト三日目。少しやると休み、という感じだったらしい。

二月二十七日（水） テスト四日目。初めて部活（テニス部）に顔を出す。不安やイヤな気持ちになる相手にも悔しさはあったようだが、今までの気持ちとは違ったよう。

学校へ行けさえすれば友だちに会える。会えば話ができる。そうすれば孤立する不安を追い払える、と思うものの、現実には登校するという行為は、南雲にとって重荷でもあった。というのも、彼には記憶をストックしておく能力が他の人に比べて大きく劣っていたからである。

高校生になっても、翌日に着ていく洋服を前夜のうちに順番に着られるように並べておかないと、安心して眠れないのです。このことを友人の六割は知らなかったと思いますが、隠していたのは知られることで余計な思惑（差別も含めて）を受けるのが煩わしかったです。同級生の中には、僕の休みがちな態度に陰口を利いている者もいたようですが、僕も自分の症状を打ち明ける勇気がありませんでした。

二月二八日(木) 上級生の卒業式準備があつたらしいが、疲れてしまい、早退。五十沢(母親の実家)へ行つて休む。

三月一日(金) 一日中、休んでいたが、久し振りにバイク(五〇cc)でコンビニまで行く。夕方、友だちからTELあり。午後六時四五分の電車で六日町に行き、泊まる。

三月二日(土) 午後四時頃帰宅。

三月三日(日) 一日のんびり過ごす。

三月四日(月) ~五日(火) 学級対抗球技大会へ行く。

三月六日(水) 家で休む。定期券を一か月分買う。

三月七日(木) K病院通院日。バイクで駅まで行く。

三月八日(金) 午前七時一六分の電車で学校へ。

三月九日(土) 午前七時三七分の電車で学校へ。一〇時過ぎに帰る。午後三時頃バイクで六日

町へ。友だち宅へ泊まる。

三月一〇日(日) 夕方帰宅。夜、友だちが泊まりに来る。

三月十一日(月) 朝方、友だち帰る。夜イライラが見える。

三月十二日(火) 家で過ごす。

他人にできることが自分にはむずかしい日常が不満の元凶だと知った南雲は、原因がどこにあるかがまったく分からず、常に心が落ち着かずイライラする。揚げ句に気持ちがいらいでパニック状態になる繰り返し返して、無闇に苛立つ精神状態が日常となる。当時の本音は、とにかく普通に生活したい、というものだったが、南雲にはその「普通」があまりにも荷の重いものだった。

当時の僕は、唯一の親友と徹夜で話す時間しか心が和まなくなりました。ところが高三になる四月から僕は長岡明德高校の定時制に転入し、その親友とも別々の道に行くことになり、正直、寂しい思いでした。明德高校の定時制三年へ転入することで、僕の人生が変わるかど期待が膨らみましたが、それでもまだ自分の人生は将来どこるか明日も見えない。「お互い、「頑張ろうぜ」と言ってくれた親友には感謝しましたが、一人になると無性に怒りが込みあげました。「オレの人生って一体、何だ？ 普通になりたいッ！」

三月二三日（水）（二階の部屋で）大きな声を出す。イライラ。夕方、K病院へ連れて行き、注射をしてもらう。

三月一四日（木）家で過ごす。大声を出す。イライラ。

三月十五日（金） イライラがひどくなり、「どうしたらいいんだ」「生きていてもいいことない」「窓から飛び降りたい」と言いだす。午前に仕事（保育士）から帰り、お父さん（南雲利己）とK病院へ。昼頃、帰宅。注射や薬はまったく効かず、炬燵を蹴ったり、二階から飛び降りるとか叫んでどうしようもなく、本人も入院を希望。午後四時三〇分に家を出る。午後五時一〇分、病院着。（比較的症狀の軽い患者を収容する）三階に入院。午後七時三〇分に（私は）家に帰る。夜、カウンセリングのK医師と話をし、少し楽になった、とTELあり。

この当時の南雲の思考回路は最悪だった。自身の存在への怒りが暴力的に全身を掻き乱し、正常な感覚が飛んで行ってしまった、と振り返る。そして思いもかけない突発的な行為に身を任せることになる。

僕の家は三階建ての造りになっていて、冬の積雪のための高床式なので一階は物置と車庫、二階が居間と台所、三階が家族の寝室と客間です。僕の部屋は二階の階段を昇った三階北側の突き当たりでした。春寒の日の「その行為」をはっきりと憶えています。正氣に戻ると僕は二階のベランダから飛び降りていました。不可思議な浮遊感が感覚的にあるだけです。何も彼も煩わしい重荷を捨ててしまいたかったのだとは後で気づきましたが、

死にたいという欲望よりも、全身を縛る憂鬱な現実を消してしまいたいからだだったのだ、
と思います。

二度目の自殺未遂だった。ベランダと庭との狭間はわずか一メートル。その狭い空間を垂直に南雲は飛び降りた。約三メートルの高さからジャンプしたわりに骨折はなく、当初は足の踵に鈍痛が走る程度だったが、これを契機に南雲の心の中に、「それでも生きたい」という切実な思いが芽生えてくるようになる。その意味では大きなターニング・ポイントと言えるが、当時の南雲にはそのことがまだ明瞭に見えていなかった。自殺未遂のあと、南雲は一晩だけK病院に入院することになった。

三月一六日（土） 午前中にK病院に行く。前日と別人のように元気になる。先生と話したことにより、気持ちの持ちようだということに気づく。まあいいか、と思えるようになり、外見は真面目でも中味はちゃんぽらんでいいんだ。そういうふうになったら、と言われたらしい。病院にいても仕方ないとのこと、退院してくる。帰りに（私の知人の）美容室に立ち寄り、本人と話をしてくる。踵が痛いと言うので、午後にはS整形外科へ。

退院した帰りに知り合いの店の席を借りて、母親と向き合いました。苛立ちが少し治まると、親に対して済まない気持ちがあふれてきて、真っ直ぐに視線を合わせられないまま時間が過ぎました。しかし、母親が正面から見つめてくれている実感が安堵感あんどかんとなり、僕にとつての救いになりました。なぜ、軽率けいそつにもあんな愚かな飛び降りをしてしまったんだろう、といった悔いを感じました。中学三年のときに好奇心で喫煙をし、高校に入って母親の目の前で煙草を吸ったことがありました。自分の弱さを認めるのが恥ずかしい、幼稚な見栄みえでした。本心は、自分はこのくらい苦しいんだという内面を分かってもらいたいだけだった、とも説明できずに、自分の状況が掴めない現実に苛立つたのだと思います。

このときの母親は「馬鹿なこととは止めなさい」と言っただけだった、という。退院の帰りのこの短い母子の対話に、自分を見守っていてくれる親の存在のありがたさを南雲は強く感じた。母の言葉は重くそして自分の考え方が少しポジティブな方向へと向かっていることを意識した。それが南雲にかつてないほどの「勇氣」を与えてくれた。

三月一七日(日) 一日、落ち着いて過ごす。

三月一八日(月) (明彦が)髪を染めてくる。N君という子が長岡の明德へ進む方向に決まっ

たらしい。

三月一九日（火）（明彦は）両足の踵がまだ痛いらしい。

三月二〇日（水）く二二日（木） ゆったり過ごす。

三月二二日（金） 夕方、担任の大塚先生が来宅。手続きのための願書と転入届の用紙を取りに来てくれる。

三月二三日（土） まだ足が痛むということで、病院へ行く。ヒビが入っている可能性があるらしいが、踵パットをして、痛み止めの薬をもらう。

三月二四日（日） 午後になり様子がおかしい。受験への不安と思われる。

三月二五日（月） 午後三時頃、（職場の）保育所へTELを寄越してイライラしている様子。

帰宅してK病院へ行き、注射をもらう。受験票が届く。四一四番。

三月二六日（火）（職場に）一日休みをもらい、様子を見ることにする。K病院へ行き、また注射を受けるが、大病院の先生の態度に（明彦が）イラつく。夜はよく眠る。

明德高校への転入を前にして、情緒不安定な時期でしたが、僕は、自分の明日に希望を持ちたい、希望を捨てずに自分が変われば、何かが変わるかもという期待がありました。現状から変わりたいとずっと願っていましたし、中途半端な不登校のままでは僕の状況が

変わらないことが分かりかけた時期でもありました。

それでも、K病院での専門医から言われた「逃げてここに来るな」みたいな言葉がトラウマになり、思い返すたびに傷つきました。僕はそんな中途半端な冷やかして苦しんでいるんじゃないと。その日、病院の帰りは母と気まずい沈黙がつづきました。

三月二七日（水）朝は落ち着いた様子。いい（精神）状態で長岡明德高校へ出かける。朝七時一六分発の電車に乗る。

三月二八日（木）午後、（明彦が）合格発表を見に行く。午後三時過ぎ、「受かった」と連絡入る。

三月二九日（金）入学説明会に保護者同伴とのことで、お父さんとN君親子と四人で車で出かける。一日がかり。

三月三〇日（土）午前中、六日町高校へ行き、大塚先生、高橋先生と話してくる。夕方、（明彦の）同級会。

三月三一日（日）朝方、戻ってくる。疲れた様子。

発達障害などの分野で先進国の米国に合衆国公法（P.L.九四—一四二）が制定されたのは

一九七五年のことである。この法律によって、「LD」という診断名が社会的に認知されたといってもいい。この法は「LD」をはじめとするさまざまな障害を持つ子どもが無料で適切な教育を受けることを保障している。二〇〇〇年においては米国全体で一二パーセントの子どもがこの法律の適用を受けているというが、そのうちの約半数が「LD」なのだという。

一方、日本においては、軽度の障害を持つ児童生徒が通常学級に籍を置いたまま、障害に応じた特別の指導を受けられる「通級による指導」が実行されることになったのは、一九九三年度からだ。しかし実態は思ったほどに普及せず、世間での認知度が低いままという実相がある。しかも、LDやADHDの児童生徒が通級による指導の対象になったのは二〇〇六年度からにすぎない。「特殊学級」（現在は「特別支援学級」と呼称されるが、実体は本質的に以前と同じ）で授業を受ける現状を脱し、個別的な指導が行われることが急務に思う。

強迫観念と苛立ちの日々

欧米ではLD（学習障害）を持つ子どもは「自分は先天的に中枢神経系に少し障害がある」という事実をあまり隠さないという。LDなどの障害に対する知識が社会的に広まり、障害を發見し、サポートするシステムが構築されているからであろう。

その欧米では早期發見、早期特別支援が徹底している。米国ではLDのある生徒のほとんどが通常の小学校・中学校・高等学校において、一般の学級を基本に支援教育が受けられる。このような対応の背景には、LDを特別視したり、蔑視しない、いわば「多様性に対する寛容さ」があるのではないかと思われる。

「僕はなぜ他人と違っているのだろうか」という思いはまだまだ重荷でしたが、そんなある日、そもそも自分自身がつねに「なぜ」と思っていることに問題があるのだと思いはじめました。他人と異なることへの自己嫌悪こそが、自分を苦しめているのだと気づいたのです。でも、だからといって苦しみがなくなったわけではありません。

当時の僕は、四月からの新しい環境への希望と不安が胸のなかを行き交っている状態でした。生活が変わることで気持ちも前向きになれるのでは、という期待と、はたして新しい学校で人間関係を上手く築けるだろうか、また元の木阿弥もくあみに戻るんじゃないかとの二つの感情が激しく交錯こうさくしていました。

四月一日（月） 午前に六日町へ行く。学校（県立六日町高校）で友人と会い、昼食を一緒に食べるためにバイクで向かう。疲れたらしく五十沢（母の実家）の家へ寄る。夜になり、迎えに来てほしいとTELあり。迎えに行く。

四月二日（火） 薬を服用すると（体が）だるい、と言うので翌日（四月三日）からまったく飲まなくなる。

四月八日（月）（県立長岡明德高校定時制の）転入学許可式に、お父さんと一緒に車で行き、参加。

四月九日（火） 朝は新幹線で、帰りはN君と上越線で帰宅。

四月一〇日（水） 登校する。体力的に疲れるようだが、気分はまあまあの様子。

四月十一日（木）（明彦は）六高（県立六日町高校）に顔を出し、大塚先生、保健の若井先生と話してくる。

四月二三日（土）～一四日（日） 家でゆったり過ごす。庭で智子（明彦の妹）とバドミントンを
する。二人とも楽しそう。

四月二五日（月） 授業はまだほとんど自習。午後になって帰宅。少しずつ体を動かす。

四月一六日（火）（明彦は）六高のテニス部へ顔を出す。

四月一七日（水） 授業が少しずつ始まる。夕方帰宅。部活（バスケット）を見学してきたとの
こと。

四月一八日（木） 学校から帰ってきてから、少しテニスをし、またバイクで出かける。

当時の僕の足は五〇ccのバイクでした。黒いバイクのハンドルを握り、風を切って走る
爽快感は僕の灰色の心を解放してくれる気がしました。バイクと一体となると、自分には
何も苦しみがないかのように錯覚しました。国道を走りながら、このままどこか見知らぬ
世界へ飛んで行けたらいいのに、と思ったりもしました。誰も僕のことなど知らない大都
会会なら、この曖昧とした不安と恐怖が解消されるのではないかという甘い幻想も、バイ
クを飛ばしていると抱けました。

四月二〇日（土）～二二日（日） 家の手伝い（農作業）。

四月二日（月）～三日（火）（気分が）だるいと言って、学校を休む。

四月二日（水）～二六日（金） 学校へ行く。二六日にテニス部に入部。

四月二七日（土）～二九日（月 祝日） トラクターに乗り、田植えをする。

四月三〇日（火） 胸が苦しくなると言って帰宅。どうやら学校に行つてない。

五月一日（水）～一六日（木）（明彦は）登校しない。家でゆったり過ごす。

三年生として転入した高校（県立長岡明德高校）は長岡駅のすぐ近くにあり、定時制でしたが授業は昼間に行われました。この新しい環境に早く慣れたいと、バスケット部やテニス部のクラブ活動の様子を見学に出向きました。身体を動かすことが好きな僕にとって、運動部に所属するのは気分転換になると思つたのです。とりあえず、経験のあるテニス部（中学時代は硬式）に入部届を出しました。

しかし、転入の日から僕の心を落ち着かない状態が占領していたことと、自分が思い描いたような部活動ではなかったこともあり、学校から自然に足が遠のきました。自分でも授業への情熱が冷めて行くのが分かりました。その最大の原因は、級友たちのほとんどが高校卒業資格の取得が主たる通学と思ひ知つたからで、僕のように大学進学を考えているのは少数派だったのが分かつたからです。

転入して一か月足らず、ゴールデン・ウィークの直前に、過呼吸の息苦しさに襲われて不眠になり、学校へ行く意欲が失われるのを抑えられなくなりました。過呼吸は新しい環境に馴染ま^{なじ}ない対人恐怖に似た症状の緊張のせいだと知りましたが、どうしようもありません。そこで気分転換のために、折しも雪も消え、清々しい風が吹き渡る気分の良い田植えの季節だったので、地方公務員の父が休日に行う農作業を手伝いました。トラクターを操縦したりしたことを覚えています。

五月二七日（金） 分家羽田屋^{はねだや}の叔父さん（父方祖父の弟。明彦を可愛がる）が山菜取りで崖^{がけ}から落ちて亡くなる。

五月一九日（日） お通夜。

五月二〇日（月） 葬式。（明彦は）気を遣^{つか}ってよく動く。

五月二一日（火） 三日間（の葬儀手伝い）で疲れたのか、またイライラ。

五月二二日（水） イライラが募^{つもの}る。薬も病院も嫌がる。

五月二三日（木） 午後、病院へ連れて行こうとしたら、家から出た^でくなくいと嫌がる。夜は少し

落ち着く。

五月二四日（金） 午後、長岡の〇心療クリニックに予約していたので行く。年配の先生だった

が、今までとは違う薬で治療を始めてくれる。本人も悪い印象は持たなかった。

五月二十五日（土） 午前中は部屋にすることが多い。夕方、TVを観て笑ったりしている。夜、友だちから誘いがあり、出かけて、翌朝、戻ってくる。

五月二十六日（日） 薬を飲み、午前中眠る。

人の死はシヨックです。しかも近親の死となれば心穏やかではありません。僕は二度の自殺未遂の体験があるので、度々、「人の死」について考えます。人はどうしてこの世に誕生するのか。最近になってですが、人の誕生には何か意味があるのではないか、と思ったりもするようになりました……。

僕には死に関して強い記憶があります。中学（町立湯沢中学校）のときの親友の死です（後述。七月六日の記録参照）。テニス部で一緒だった彼がバイク事故で亡くなったのです。人間って、こんなに簡単に存在を消してしまうのか、と呆然ぼうぜんとなりました。僕が生まれる数年前、自殺した親戚がいたことを後に知ったときも、その衝撃で落ち込みました。

羽田屋の叔父さんの葬儀に参列して、なぜ自分だけ生きていられるのか、生きることの意味があるのかと考えてしまいました。しかし、自分が生きていられるということには何かの意味があるのではないかと思ったりもしました。誰かが僕に「おまえは、生きること

にもっと前向きになるべき」と告げているのではないかと思ったりもしたのです。

六月一日(土) 午後通院(〇心療クリニック)し、同じ薬を二週間分もらって帰ってくる。

六月二日(日)〜二四日(金) 学校は行かない。薬は飲む。

六月二五日(土) 午前、畑に行ったり、羽田屋に行く。昼頃、疲れたようで通院を嫌がるが、智子と二人で長岡に行き、薬をもらって来る。次を一九日に予約してくる。

六月一九日(水) 一二時が予約だったので、(職場の)休みをとって一緒に行く。薬が変わった(昼・ソラナックス/レキソタン。夜・レンドルミン)。

渡された薬を服用すると思考回路が乱れ、効果が切れた後はボンヤリして苛立つたり、身体が上気したりしました。薬に頼ることに疑念を抱き始めた頃でしたが、明日を生きたいために、まず今日を精いっぱい生き抜こうと決めて、薬を飲みつづけました。

そんな中で、妹の智子と一緒にいると気分が和みました。母親に似ておっとり型の智子が、ゆつくり喋ってくれるのも僕には聞きやすくて、滑らかに会話が成りたちました。僕と接するとき、いろいろな仕種に僕への自然な優しさが伝わります。「他人に神経を遣いすぎる」と妹に指摘される僕ですが、ほかの人ともこんな気安い関係が結ばれればいい

のに、と思ったりしました。

僕は今でも屋外での会話には苦勞します。相手の声を聞きとろうと集中するので、それ以外の余分な雑音も拾ってしまい、逆に意味が読みとれないときがあります。例えば、発音の似た単語（「足」と「箸^{はし}」）を聞き分けるのが困難なことがあります。自分の工夫で会話を成立させなければ、と思っっています。

六月二〇日（木）薬のせいかイライラしている様子。夕方、〇心療クリニックにTEL入れる。相談したところ、前のカルテが手元にないので元の薬に戻し、飲ませたらとのこと。

六月二一日（金）午後もイライラ。部屋の壁を殴る。昼にまたクリニックにTEL。夕方は落ち着く。薬は、昼はソラナックス、レキソタン。夜はレンドルミンを飲むことに。

六月二二日（土）羽田屋の四十九日法要。朝は落ち着く。（明彦が）お墓に納骨のとき手伝いに来る。

七月一日（月）（明彦が）一人で長岡へ行く。薬が変わる。デパス（二日三回）とデプロメール（二日一回）。

七月六日（土）同級生がバイクで亡くなる。

七月七日（日）（友の死の）ショックで様子がおかしい。

七月八日（月）（自分には）何もできないとイライラする。夜、デパスを飲み、少し落ち着く。お通夜に一緒に行く。

LDやADHDなどに対する薬の効果については専門家の見解が必ずしも統一されていない。米国ではADHDに「リタリン」という薬が多く処方されるがこれも決定的な治療法とは言いがたい、のが現状だ。むしろ、「リタリン」など薬物治療に偏向する姿勢を懸念する精神科医などは多い。薬剤は補助手段だと認識し、個々の状態に応じての指導プログラム、さらには周囲の人の理解、また彼らを受け入れる社会的土壌の整備こそ重要、と指摘する人は少なくない。

七月九日（火）～一七日（水） この時期、ゆったり過ごす。

七月一八日（木） アルバイトをしたいと言い、自分で探す。越後中里なかざとのリゾートホテルの客室清掃をすることにした。

七月二二日（月）～二三日（火） バイクに乗ってバイトに行く。食欲がないのが気になる。

七月二四日（水）～二六日（金） バイト三日間休み。友だちが新潟から泊まりに来る。（帰ると）気を遣って過ごしたのか、少し寝不足なのか、イライラ。デパスを飲む。

僕は夏が嫌いです。この季節になるとなぜか自分で自分を抑制することがむずかしくなるからです。それに加えて、薬を服用するようになって吐き気を催し、度々^{たびたび}、食欲不振と眠気に襲われました。薬が切れると神経過敏となり、気持ち荒^{すさ}む感覚に陥りました。

夏休みに入りましたが、二学期以降、高校（県立長岡明德高校定時制）へ通う気力は残っていませんでした。心のモヤモヤが全然、消えなかったからです。どうしてなのだろう、
と思い、自分の身体の機能に問題があるのかも悩むようになってきましたが、その段階では具体的に何も分かりませんでした。

本来、外向的な性格の南雲にとって、部屋に引きこもっているのは耐えられないことだった。「何かしなければ自分が自分でなくなる」との強迫観念に悩まされ始める。その感情は自己否定にも通じてしまう。定時制と言っても昼間の生活だが睡眠が浅く感じられ、朝起きても熟睡した気がしない。朝の南雲はいつも身体が硬直している状態だった。

悪夢は見ませんでした。むしろ強迫観念めいた不安に脅かされるようになっていました。手洗いのことです。一度、自分の手が汚れていると思うと、徹底的に洗わないと気が済まなくなつたのです。一日の洗浄の合計は平均一時間。一回五分から十分間、水洗いをしま

した。石鹼せっけんを使わないのは泡が洋服に飛んだりすると、新しい洋服に着替えないと気が済まなくなるからです。自分が異常に神経過敏になっているとは気づいてはいるのですが、自分の鼻や唇くちびるすらも触れられませんでした。鼻や唇に触ると、また手が汚れたような気がして、徹底的に洗浄しないと気持ちが落ち着かないからです。

こんな具合に部屋に閉じこもって自分と向き合っているのにも疲れたので、外へ出てみようと思ひ、バイトを決意しました。

南雲のアルバイトはホテルのベッドメイキング、窓拭き、ゴミの整頓、備品整理などだ。バイトに没頭していれば、心の苦痛を忘れていられるかと思つたのである。

七月二十七日（土）～三二日（水） 朝は落ち着く。バイトに行く。バイト時間は午前一〇時から午後五時。

八月一日（木） ようやくバイトが二日休みになり、長岡の〇心療クリニックへ行く。一か月分（二八日分）の今までと同じ薬をもらってくる。

八月二日（金） バイトに行くが、午後になり三七度の熱と吐き気で帰ってくる。町の診療所へ行き、風邪薬をもらってくる。夜、早目に寝る。

八月三日（土） 熱が下がりバイトに行く。バイトの時間は午前八時〜午後五時。一日何とか働いてくる。疲れた様子。

八月四日（日）〜五日（月） 午前八時〜午後五時バイト。

八月六日（火） 午前一〇時から午後五時までバイト。（明彦は）お父さんとラーメン屋で夕食を食べる。

八月九日（金） バイト休み。夕飯を一人で近くの食堂で食べ、塩沢のバイト仲間とサッカーをする。

八月一二日（日） 昼頃、バイトから帰ってくる。吐き気がしたとのこと。疲れが溜まったのか。
八月一二日（月）〜一三日（火） バイト休む。イライラしている。「みんながやっていることが、どうして自分にはできないのか」と言う。

バイトがつづかなかったのは、「仲間が簡単にこなしている作業が僕の手には負えない」という現実の壁を実感したことにありました。なぜ自分だけできないのかという屈辱感。なぜ僕だけが、こんな苦しみに遭わなければいけないのかという憂鬱ゆううつ。学生時代に感じていた「他人との違い」を、バイトではあったけれども「大人の世界」からも突きつけられたと思いました。

簡単なバイトでも自分の居場所がないことを実感させられたことの衝撃は深かった。仕事そのものは体力的な負担もそれほどないのに、他の仲間とは異なり、ちゃんとこなせないためにバイト仲間^{ひら}に卑屈^{ひく}になる自分が嫌でたまらなかった、とも告白する。

だが、「みんながやっていることが、どうして自分にはできないのか」と母親に愚痴^{ぐち}つたことがきっかけになって、物事が少しだが前進しはじめる契機となる。

八月二四日(水) 朝早く、バイト先へ行き相談してくる。病気のこと話してくる。一応、午前一〇時から午後三時まで、残り五日間続けてみようということにしてくる。自信はあまりないと言うがバイトに出かける。

八月二五日(木) (バイト先に)話を聞いてもらったことで安心したのか、また元気になりつつある。午後三時に帰ってくるので昼食は持たずに行く。

八月二八日(日) ～ 二九日(木) 午前一〇時から午後五時(たまに午後六時)まで仕事をしてくる。八月二三日(金) 一時間働いた後、下腹部が痛み休む。

八月二四日(土) 午前中に、行きつけのN病院が休みなので、Aクリニックへ行き、診てもらふ。少し、微熱がある。腸の炎症^{えんじやう}だろうからと整腸剤と抗生剤をもらってくる。盲腸ではないだろうとのこと。午後^{ごご}にまたバイトに。

八月二十九日（木） バイト午前一〇時から行く。

バイト先に僕の症状を母が説明してくれたことは、僕にとって劇的な前進につながりました。むろん、当時は「ディスレクシアだとは僕も母もまったく知らなかったので、「神経を遣いすぎて疲れやすい体質」程度の説明だったのですが、それでも自分の実情を家族と医師以外の人に告げるのは初めてのことでした。ことさら隠してきたつもりはなかったのですが、自分の現状を知ってもらったことで僕は少し救われ、何となく安心する気持ちになりました。

当時、専門家から読み書き困難のLDだ、と早期に的確な診断をされていれば、南雲のイライラも違った形になっていたかもしれない。

ただ、本人と家族しか知らない苦しみに関して、医学的に正確ではなかったにせよ、ともかく外部に告げた事実、南雲にとつての新たなページをめくる第一歩になった。

九月二日（月）（明彦は）長岡の心療内科Nクリニックへ行く。帰りに県立長岡明德高校へ行き、大検（大学検定）の話や専門学校の話をし、一一月に試験があると聞く。

九月三日（火） 専門学校などのことを自分で調べている。

九月五日（木） 六高（梶立六日町高校）に相談に行く。

九月六日（金） 公民館で受験勉強をする。

九月七日（土） 五十沢へ泊まりに行く。

九月八日（日） 五十沢から帰ってくる。ピアノ教室へ行く。

九月一日（水） いろいろと考え始め、少し疲れた様子。

九月二三日（金） 買い物に行く（ベッドやMDコンポなど）。

九月一五日（日） （明彦が選んだ）ベッドが届く。

九月一六日（月） 勉強をするとイライラすると言う。（体の）調子が悪いようだ。

九月二一日（土） 稲刈りの手伝いに、（明彦）本人は手伝えないことに苛立^{いらだ}つ。

九月二二日（日） 午後から部屋で眠るがイライラがひどい。

九月二三日（月） 朝は体調がいいが、夕方がやはり良くない。デパスが少なくなる。

九月二四日（火） 薬がなくなるので、長岡の病院へ行かなければならないのだが、本人は行く

気になれず、代わりに行く。午前十一時に家に帰り、午後三時に職場に戻る。

九月二五日（水） 他人と会いたがらないが家では落ち着く。

その頃、ときどき近くのピアノ教室へ気晴らしに通いましたが、長つづきはしませんでした。結局、僕はバイトにも出ずに三階の部屋に閉じこまりました。奇声を発することもなかったのだ、母は一段落したのかと思つたでしょうが、その頃の僕は何時間も自分自身と向き合い、何時間も自分自身を見つめていました。「なぜ他人ができることが自分にできないのか」との劣等感が、僕の神経を細い針で刺すように間断なく傷つけていました。「絶対に何か僕には特別な原因があるにちがいない」とその頃になつて確信するようになっていました。でも、もちろんその答えはまだ分かりません。

ところで、家に引きこもつていれば客が来ます。地方なので玄関の鍵を掛けるという習慣はなくて、顔見知りならば勝手に出入りします。来客があつて、「誰か居ますか」と声をかけてきても、僕は自分の部屋に引きこもつたままで、返事などできません。ましてや顔など出せません。それでも親類や知人は鍵が開いているものだから、どんだん家の中へ入つて来ます。

そして僕が部屋にいるのを見つけては、「なんだ、居るんじゃないか」という妙な顔をします。家族と身内（祖父母）以外は、いくら親しい人でも僕の症状を知りません。誰も顔を合わせたくない僕が、無愛想ぶあいそうな対応をしたのは言うまでもありません。

南雲にとつては将来への不安が解消されない時期であり、苛立ちの原因が何かを突き止めた
い気持ち有一段と強く湧いていた。だが南雲自身の現実には孤独であり、陰鬱な気分いんうつに耐えきれ
なくなると知り合いに会いたくなくなったが、狂気じみたものが自分から垣間見えてしまうのでは
ないかとの錯覚に襲われ、慄おそき、結局は引きこもつた。

一〇月一日（火） 午前一〇時頃、バイト先から手伝つてほしいとのこと。（明彦）出かける。
午後三時頃、帰る。

一〇月三日（木）（町立湯沢中学校の）テニス部の食事会があるとの連絡。行けそうもないと話
すが、まだ断っていない。

一〇月四日（金） 先日のバイトの手伝いの緊張の疲れからか、イライラが増す。家の椅子を蹴
飛ばす。智子にも当たる。〇心療クリニックにTELして相談する。疲れやすいのだから無理
に人と会つたり、バイトも良くないし、（本人が）好きなように過ごすのが肝心とか。

一〇月五日（土） 金曜日になるとイライラして体調が悪いと言う。土曜と日曜が嫌らしい。休
日は外へ行つても人が休んでいるし、家にも家族がいるからだという。人と会うのが嫌なので
仕方ない。

一〇月六日（日）～二日（金） 外出しない。家で過ごす。（テニス部の）食事会が近づき（精

神的に)負担になっているようだ。

一〇月一八日(金) 食事会の当日。行きたい気持ちはあるが、体がついていかない。胸が苦しいと言う。心臓がドキドキするときは暗い部屋で深呼吸するらしい。どこにも行く気がしないという。病院に行けない。人込みが嫌だと言う。電話もイヤ。メールは緊張しないのでOK。(食事会へは)薬を飲んでから行くかと聞くと、胸が苦しくなったらしい。結局、行かないことに決め、落ち着く。気持ちは行きたいが体が拒絶している。たぶん、行っても話をせず、イライラするだけだと思う。(明彦の)体と心がバラバラ(になっていると思う)。

(明彦に気が付いたこと)

- 一・文字を読むとイライラ立つ。
- 二・同級生と上手に話すことができない。
- 三・電話をするのも嫌だ。
- 四・胸が苦しくなつてドキドキする。

自分の苛立ちの原因を確かめたい気持ちは芽生える一方で、いまだに親とも話したくないし、友だちと会話するのを厄介ちがひに感じ、電話口で喋るのも億劫おっくうな日常。以前とは異なり、同級生と

の会話で冗談が言えなくなっていると自己確認しはじめる。変質した己と葛藤し、対峙した時期だ。ただユニークなことに、対人恐怖の症状はあってもメールだけは気にならなかったという。

(メールが平気だったのは) 向かい合って話すのと違い、緊張せずに済むからです。それにメールなら文字も大きめに設定すれば読みやすくなるし、電話なんかと違ってすぐに返事をしなくても済みます。中学の部活の大会で知り合った女子のメル友もできたのですから。しかし、活字を読むと神経が逆撫でされ、頭の中が混乱し、吐き気を催して心臓の鼓動が異常に強く感じる度が度々ありました。母もこの頃は僕の異常の原因に気づいたみたいで、以前よりも僕の行動を注意深く見つめるようになった気がします。僕が「ディスプレイの典型的な特徴」を意識しはじめた端緒です。

一〇月一九日(土) 少し落ち着くが外出は嫌だし、病院にも行きたくない(と言う)。(父方の)祖母が帰宅。(明彦と)話をすると行って部屋へ行ったみたい。

一〇月二二日(月) 午後から休みをもらい、病院へ薬をもらいに行く。

十一月一日(金) 今週あたりから昼間、ちょっとだけ外へ出るようになる。めずらしく羽田屋

へ行ってくる。

一月八日(金) 昼頃、イライラが募^つっているようだ。午後、クリニックへTELする。診察が終わる頃に連絡を入れてくださいと言われ、午後六時三〇分頃TELするが、まだ診察中で、終わってから先生からTELをくれる。通えないならY病院(新潟県浦佐^{うらさ})へ行ってみたらと言われ、通院の回数を増やしたらいいとのこと。

一月九日(土) 午前中、またイライラ爆発！ 昼、ラーメンを食べ、薬を飲む。午後二時頃、顔色も快方に向かい、少し落ち着く。Y病院のことを中里の角谷さん(保健士)に聞く。(明彦は)ケーキを食べる。

一月一〇日(日) 朝は昨日より気持ちは落ち着くが客の出入りがあり、少し嫌がる。畑の仕事があり、その後に(明彦の)顔をあまり見ていないが、夕方にイライラ。

一月一二日(火) Y病院にTELしてみる。火・木・土とやっているが、火曜日と土曜日は医師が代わるとのこと。木曜日なら同じ医師であるとのこと。やっぱり長岡の〇心療クリニックがいいと考える。

僕は落ち着かない時間に流されて、家族と顔を合わせても苛立ち起こるし、家に客が訪れると一種のパニック状態になり、身の置き処^{ところ}を見失ったようにうろたえました。「こ

こは僕の家のなに何で他人がいるのか」という戸惑いと怒りです。僕のそうした苛立ちをもっとも近くで見ている母に、僕は暴力をふるうこともしばしばありました。でも、「本当にこれでいいのか」と思う心も次第に強くなりました。

この時点の南雲は、暴力や悪口という形で、一方的に自分の思いを投げかける手段しかなかった。そんな行為でしか南雲は「自分が生きている」ことを確認できなかったのだろう。

ところで取材途中で巡り会った『病の起源 2』（NHK出版）の、第一章「読字障害」に「のちに私たちは文字を発明し、高度な文明を築き上げてきた。／しかし、その陰で、人間本来の大切な能力を失ってしまったのではないか。／読字障害は、そう私たちに問いかけているかもしれない」の一文が記されている。これはディスプレイアについての的確な示唆と指摘であると思う。

僕は、字が読めない。 小菅宏著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,500 円（税込）
ISBN 978-4-7976-7193-3

ウェブでのご注文は [こちらにどうぞ!](#)